HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	公共的意思決定場面において当事者性と利害関係が信頼の規定因に与える影響
Author(s)	佐藤, 浩輔; 大沼, 進
Citation	社会心理学研究, 29(2), 94-103
Issue Date	2013-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55891
Type	journal article
File Information	29_2_SATO.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

The Japanese Society of Social Psychology

社会心理学研究　第29巻第2号
２０１３年，94–103

［原著論文］

公共的意思決定場面において当事者性と利害関係が信頼の規定因に与える影響

佐　藤　浩　輔（北海道大学大学院文学研究科／日本学術振興会）
大　沼　　進（北海道大学大学院文学研究科／社会科学実験研究センター）

Influences of involvement and interest over determinants of trust in authority in public decision-making

Kosuke SATO（*Graduate School of Letters, Hokkaido University/Japan Society for the Promotion of Science*）
Susumu OHNUMA（*Graduate School of Letters/Center for Experimental Research in Social Sciences, Hokkaido University*）

The current study investigates the influence of social factors, such as self-interest and involvement, on trust and its determinants, in the context of public decision-making in government, through two scenario experiments. In both experiments, participants' involvement (high/low) and, subsequent interest in the high-involvement condition (agreed/opposed) were manipulated and two trust models were compared: a traditional model, which regards expectation about intention and competence as the component of trust; and an SVS model, which regards perceived salient value similarity as the primary determinant of trust. Two hypotheses were tested: 1) conflict of interest diminishes trust and value similarity; 2) expectation of the government's intention consistently predicts trust in government, regardless of self-interest. The results supported both hypotheses. Implications of value similarity in the context of public decision-making are discussed.

Key words：trust in authority, public decision-making, risk communication, SVS model, involvement
キーワード：決定主体への信頼、公共的意思決定、リスクコミュニケーション、SVS モデル、当事者性

公共政策などの公共的意思決定場面では、利害や価値の異なる様々な立場の関係者間の合意形成が必要となる。そのような対立する立場を乗り越えた合意形成を可能にする方策を検討することが社会心理学に要請される課題のひとつである。本研究は、リスク管理者や社会的意思決定主体への信頼が重要であるというリスクコミュニケーションの信頼研究の知見に着目し、その援用可能性を探る端緒として、シナリオ実験を用いて信頼を説明するモデルの検討を行う。

リスク管理者や意思決定主体などへの信頼を説明するモデルとして長く有力であったのが、対象の能力及び意図性の評価から相手への信頼が構成されるというモデル（以下、伝統的信頼モデルと呼ぶ）である（Hovland, Janis, & Kelley, 1953）。一方、近年リスクコミュニケーション研究から登場したのが、問題に関してどの要素を重視すべきかなどの「主要な価値の類似性」が信頼をもたらすとする、主要価値類似性モデル（Salient Value Similarity model; 以下、SVSモデル）である。本研究では、この2つの信頼モデルを取り上げ、実験を用いて比較検討する。

伝統的信頼モデルとSVSモデル

社会科学における「どのような対象が信頼されるのか」という研究の端緒は、1950年代から1960年代にかけて行われた、いわゆるイェール・コミュニケーション研究にある。Hovland *et al.*（1953）は、受け手の態度変容に関して、メッセージの送り手側にかかわる主要な要因のひとつとして送り手の信憑性（credibility）を挙げ、その要素として「専門性」と「信頼性」があるとする。専門性（expertness）とは伝達される情報の正しさに関する評価であり、たとえば専門的知識や、それにかかわる技術の有無などである。また信頼性（trustworthiness）とは送り手の情報を伝達する意図であり、たとえば説得しようとする意思のなさ、正しい情報を伝えようという送り手の誠実さ、公正さなどによって構成される。これら専門性と信頼性が高い場合に受け手の態度が変容するという。

このような、相手の意図や能力に対する評価によって信頼が構成されるという考え方の延長線上には、たとえばBarbar（1983）の「技術的能力への期待」と「受託責任を果たすことへの期待」との信頼の定義がある。また、山岸（1998）は信頼する側の観点から、相手が自分に対してひどいことをしないだろうという意図性の評価である「意図への期待」と、相手が必要な能力をもっているだろうという評価である「能力への期待」から信

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

頼が構成されると述べている。環境や科学技術のリスクの文脈における研究では評価対象の様々な特性に関して検討されてきたが、それら先行研究を概観したJohnson（1999）は、それらの研究が扱っている信頼の諸要因は「能力（competence）」と「気遣い（caring）」の二次元に還元可能であると結論づけている。このように信頼とその要因にはいくつかの呼び方があるが、本研究では便宜的にそれぞれ「意図への期待」「能力への期待」と呼ぶことにする。

一方、信頼される対象の特性へのアプローチに対して、リスク研究の現場から登場したのが、問題に関する文脈特定的な価値の類似が信頼をもたらすとするSVSモデルである（Earle & Cvetkovich, 1995）。SVSモデルによれば、問題に関する主要価値（salient value）の共有または類似が対象への信頼をもたらすという。これは、当該の問題に関して、問題をどうとらえるべきか、問題のどの要素を重視すべきか、さらにはどのような結果を選好するかなどといった主要な価値が対象と似ている場合に、個人は対象を信頼するというものである（Earle, 2004; Earle & Cvetkovich, 1997; Poortinga & Pidgeon, 2006; Siegrist, Cvetkovich, & Gutcher, 2001; Siegrist, Earle, & Gutscher, 2003; Siegrist, Gutscher, & Earle, 2005）。

前述の2つのモデルに関して、様々な比較が行われてきた。Cvetkovich & Nakayachi（2007）では、質問紙調査によって、価値類似性と公正さ、能力それぞれの評価が信頼にどの程度影響を与えるか比較した結果、価値類似性が最も強く信頼を説明し、次いで公正さと能力が信頼を説明していた。さらに、中谷内・Cvetkovich（2008）やNakayachi & Cvetkovich（2010）は伝統的信頼モデルとSVSモデルの統合を試みている（以下、統合モデルと呼ぶ）。統合モデルでは当該リスク問題への関心の程度によって価値類似性の効果が異なると考える。すなわち、関心の高い人々は、すでに問題に関してどのような結果が望ましいのか、あるいはどのような要素を重視すべきかという主要価値が明確なため、その価値を共有し望ましい結果を実現するような主体を信頼する。一方、当該問題への関心が低い人々は、主要価値が明確になっていないために、一般的に重要とされる誠実さや公正さと、専門的知識や解決の能力などを重視するのである。まとめれば、統合モデルは、当該問題に対する関心が高い場合にはSVSモデルがあてはまりやすく、一方、当該問題への関心が低い場合には、伝統的信頼モデルがあてはまりやすいという二重過程のモデルである。

本研究の視点：社会的側面の検討

本研究では、利害関係という社会的要因によって、各信頼モデルの要因が信頼を規定するパターンにどのような違いが見られるかについて検討する。

これまでのSVSモデルに関する研究では、価値類似性とは包括的で直感に基づくとされ（Siegrist *et al.*, 2003）、全体として関心や価値観といった個人の主観的・心理的な側面に注意が払われており、評価者が問題に対してどのような利害を持つかといった価値の社会的な側面については十分な注意が払われてこなかった。むしろ、それらの区別がなされず、あやふやなまま“salient”な価値として議論がなされてきた。

だが、価値を規定する心理的・社会的要因を区別しないことは致命的な錯誤を生じさせうる。ある論争に対して強い利害関係をもつ人は、政策の方向性に対して強い関心と選好をもつ。利害関係をもつことが、個人にとって結果が自分にどの程度強い影響を与えるか（当事者性）、与えるとすればそれは利益と損害のどちらをもたらすのか（利害の方向）という要素からなると考えれば、当事者性は関心の強さに、利害の方向は結果の選好にそれぞれ強い影響力をもつといえる。したがって、仮に利害以外の要素が同じであるとすれば、政策との利害の一致は自分にとって望ましい結果をもたらすので、当然、価値類似性を高め、政策の支持は行政主体への信頼という形で現れるであろう。対して、利害の対立は低い価値類似性をもたらし、政策への反対は政策主体への不信頼という形で現れるだろう。すると見かけ上、当事者性の高い人々、すなわち強い関心をもつ人々の間で価値類似性と信頼に強い相関が観察されるであろう。あくまで見かけの相関であるから、この場合「主観的な価値類似性が信頼をもたらす」という説明は現実的な意味をなさない。

無論、主観的な価値は社会的要因を反映しているという暗黙の前提で議論されてきたのだろうが、社会的要因（当事者性、利害の方向）によって規定される部分とそれ以外の個人の心理的要因（興味から生じる関心、価値観）を切り分けずに議論を進めてしまうと、背後にある現実の重要な要因を見落とす危険性がある。しかも、合意形成を目指すうえで、社会的立場を無視して個人の心だけに焦点を当てたとしても有効な処方箋を提案することはできないであろう。また一方、社会的要因のみに着目したとしても、利害の対立が解消されない限り合意が形成されないことになってしまう。それゆえ立場の違いを乗り越えた合意形成を可能にするには、社会的要因による制約および心理的要因の限界の両方を理解したうえでなお何が合意形成につながるかを検討していく必要がある。

そこで本研究では、評価者の立場を実験的に操作することで社会的要因と心理的要因を切り分け、価値類似性と信頼の関係について明らかにする。公共政策にかかわる葛藤を扱うシナリオを用いて、問題における当事者性の高低、また、当事者性高における利害の一致・不一致

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

を条件として操作し、全体およびそれぞれの条件内で価値類似性や意図への期待などといった要因が信頼とどのように結びつくかについて検討する。

当事者性と利害の方向がもたらす影響の検討

公共的決定場面において、政策に対する当事者性と利害の方向は行政主体に対する信頼やその規定因に対してどのような影響を与えるだろうか。

当事者性が高い、つまり利害関係がある場合、利害の方向が信頼と価値類似性に影響を与えるだろう。利害が対立する場合には価値類似性は低く評価され、逆に、利害が一致する場合には価値類似性は高く評価されるだろう。また、行政主体に対する信頼も、利害が一致する場合には高く、利害が対立する場合には低くなるだろう。

各条件間の分散は、立場という社会的要因の違いによって生じているものであり、各条件内の分散は、価値観などの個人の心理的要因によってもたらされていると解釈できる。そのため、もし価値類似性が利害関係という社会的要因のみに還元されるのであれば、全条件をプールした全体では価値類似性と信頼との間の相関が見かけ上高くなるが、各条件の中では相関は見られなくなるであろう。

他方、伝統的信頼モデルに関しては、立場による規定因の結びつきの違いは特に積極的に想定されない。複数の主体の利害が対立する場面においては、決定の際、ある特化した専門的な技術や知識といった能力への期待よりも、事態を裁定する意思決定者がどのような意図の持ち主であるかが強く影響すると考えられる。そのため、行政主体の能力への期待の高低は必ずしも強く信頼に結びつかず、行政の意図への期待は一貫して信頼に結びつくであろう。したがって、全体をプールした場合だけでなく各条件別に見た場合も、SVSモデルよりも伝統的信頼モデルのほうが信頼をよく説明するだろう。

以上の議論より、次の仮説が導かれる。

仮説1　行政との利害の一致・不一致は行政への価値類似性および信頼の程度と関連する。すなわち、行政と利害が一致する立場に置かれた人々は、行政主体に対して肯定的に評価し、信頼するだろう。反対に、行政と利害が対立する立場に置かれた人々は、利害が一致する人々に比べて行政主体を否定的に評価し、信頼しない。それゆえ、全体に比べ、それぞれの立場ごとに見た場合、価値類似性と信頼の結びつきは弱い。

仮説2　立場ごとに見た場合でも、行政への意図への期待は信頼を一貫して説明する。したがって、伝統的信頼モデルのほうがSVSモデルよりもよく信頼モデルを説明する。

なお、具体的な仮説はないものの、本研究では検討課題として各要素間の関連についても調べ、その含意についても考察を加える。

以上、これらの仮説を検討するために、実験を行った。

実　験　1

方法

シナリオの概要　架空の公共事業をめぐる地域の対立を描いた。ダム建設計画のために立ち退きを迫られる上流地域の住民、河川の氾濫に悩まされる下流地域の住民、自然保護の観点からダム建設の中止を訴える環境団体、住民の安全確保という観点からダム建設を推進する行政の4種類のステークホルダーが登場する。シナリオは、豪雨による河川の氾濫により下流域で死傷者が発生した事態を受け、行政が上流にダム建設を計画するが、下流住民の安全を確保できる規模にするためには、上流住民が立ち退かなければならないというものであった。上流住民は土地への愛着や生活環境の変化への不適応など金銭的補償では補えない問題を理由にダム建設に反対するが、それとは別に、環境団体は自然環境保護の観点から反対を訴える。専門家による環境アセスメントについて、行政と環境団体で正反対の結論を主張する。また、環境団体はダムの代替案を提示するが、下流住民と行政はいずれも過去に取り組まれてきたことで不十分であると反論し、安全確保にはダム建設しかないと主張する。まとめると、価値基準に左右される論点は、下流住民の生命の安全確保、上流住民の立場の擁護や補償、自然環境保護、ダムや代替案の効果（または費用対効果）の4点に整理される。

予備実験　シナリオ本文に関して、利害の絡む立場の評価に偏りがないことを確認するために学生21名を対象に予備実験を行った。予備実験では、参加者はシナリオを読み、その後文章の偏りがないかなどの質問に回答した。ただし回答を始めてからはシナリオを読み返すことはできなかった。その結果「この文章は、客観的で中立的な立場から述べられている」という質問（1:「そう思わない」〜5:「そう思う」）では平均が4.33（SD＝0.73）とほとんどが中心の3よりも高い回答をしていた。また、ダム建設の是非（1:「推進すべき」〜5:「中止すべき」）を尋ねたところ平均が2.95（SD＝1.07）とほぼ3を中心に正規分布しており、中心からの有意な差はなかった（$t(20)=-0.2$）。よって、シナリオに極端な偏りはなくおおむね妥当であると判断し本実験に使用することにした。

本実験

実験参加者　学生86名が3つの条件のいずれかにランダムに割り振られた。うち回答に欠損が多い者などを除いた73名（M＝39, F＝33, 不明＝1）のデータを分析に用いた。年齢の平均値は19.89、標準偏差は1.48であった。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

手続き　当事者性が高く行政と利害が対立する条件（上流条件、n＝27）、当事者性が高く行政と利害が一致する条件（下流条件、n＝22）、当事者性が低く行政と直接の利害関係がない条件（第三者条件、n＝24）の3条件が設けられ、参加者は無作為にいずれかの条件に割り振られた。各条件では、実験参加者はそれぞれの立場の住民であると想定してシナリオを読むよう教示された。自分の立場を明確化するために、それぞれに対応するエピソードがシナリオの冒頭に付け加えられた。エピソードは、上流条件では退去を迫られる上流地域の住民の立場から、下流条件では水害に苦しむ下流地域の住民という立場から、第三者条件では当該地域とは無関係な同一自治体内の住民の立場からダム問題について描かれたものであった[1)]。

質問項目　実験参加者は、問題全体の各論点についてどの程度重視するかについて答えた後、各主体と実験参加者との価値類似性、主体についての評価（信頼、意図への期待、能力への期待など）の項目について回答した。最後に、自分の役割の確認およびシナリオの内容についての正誤問題などからなる操作チェック項目に回答した。自分の役割を間違えた者および、正誤問題で6問中2問以上誤答した者は分析から除外した。なお、各論点の重要性評価および価値類似性の評価については中谷内・Cvetkovich（2008）の文言を参考にした。主体の評価については、焦点となる行政への評価だけでなく、シナリオに登場する他のステークホルダー（上流・下流地域の住民団体、環境団体）の評価も測定した。これらの変数に対応する具体的な質問項目およびα係数は以下の通りであった。

価値類似性：「あなたがこの問題を考えるにあたって重要視することがらと、それぞれの団体が重要視するだろうと思われることがらは、どれくらい似通っていると思いますか」

信頼：「この団体は信頼できる」

各評価対象の意図への期待：「この団体は誠実である」「この団体の主張は地域全体のためになる」（行政：α＝.70, 上流団体：α＝.78, 下流団体：α＝.67, 環境団体：α＝.71）

各評価対象への能力への期待：「この団体は問題を解決できる能力をもっている」「この団体は問題に関する専門的知識を持っている」（行政：α＝.66, 上流団体：α＝.70, 下流団体：α＝.74, 環境団体：α＝.71）

以上の項目について、価値類似性に関しては1：「全く似ていない」〜7：「非常に似ている」、それ以外の項目に関しては1：「全くそう思わない」〜7：「非常にそう思う」の7件法で尋ねた。

1）実験1および実験2で用いたシナリオについては、2013年現在、筆者のホームページ（http://lynx.let.hokudai.ac.jp/~csato/）内で閲覧可能である。

結果

性差および年齢については以下の分析では有意な効果が見られなかったため言及しない。

条件ごとの行政主体への評価　条件の操作による違いを確認するために、行政への評価の条件ごとの差を調べた。条件ごとの主要変数の平均値および標準偏差をTable 1に示す。

各変数に関して、当事者性と利害に関して操作した条件を独立変数とする一要因3水準の分散分析を行った。その結果、行政に対する信頼では条件の主効果が有意であり（$F(2, 70)=3.22$, $p<.05$）、価値類似性でも有意な主効果が見られた（$F(2, 70)=6.10$, $p<.01$）。さらに多重比較（Tukey法：有意水準5%）を行ったところ、上流条件と下流条件の間には有意な差が見られたが、第三者条件とはどの条件とも有意な差は見られなかった。つまり、行政と利害が一致する下流条件の参加者は行政と価値が類似していて、行政を信頼していると評価し、反対に、行政と利害が対立する条件では行政と価値が類似しておらず、行政を信頼していないと評価していた。また、第三者条件では、上流条件と下流条件の中間的な評価をしていた。よって、仮説1はおおむね支持された。また、意図への期待については有意な主効果は見られなかったが（$F(2, 70)=2.24$, $p=.11$）、信頼や価値類似性と同様に、下流条件で最も高く評価し、上流条件で最も低いという傾向については同様のパターンであった。能力への期待については有意な主効果は見られなかった（$F(2, 70)=1.12$, *n.s.*）。第三者条件や利害の一致しない上流条件でも、中心よりも高い評価であったことから、能力への期待は立場の違いによらずある程度は高く評価されていたと解釈できる。

信頼と各変数の関連　行政への信頼を目的変数とする3つのモデルを設定し、それぞれの変数と信頼との関連を検討した。第一のモデルは、価値類似性のみを説明変数として投入した単回帰モデル（Model 1：SVSモデル）、第二は、意図と能力への期待を説明変数として投

Table 1　行政への評価（実験1）

	上流条件（n＝27）	下流条件（n＝22）	第三者条件（n＝24）
	M（SD）	M（SD）	M（SD）
信頼	3.44（1.15）	4.27（1.08）	3.83（1.17）
価値類似性	3.78（1.78）	5.09（1.02）	4.63（0.97）
意図への期待	3.80（1.15）	4.34（0.93）	3.75（1.04）
能力への期待	5.28（1.15）	5.48（1.14）	5.00（0.96）

※数字は7段階尺度の平均値、括弧内は標準偏差。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

入したモデル（Model 2：伝統的信頼モデル）、第三は、上記2つのモデルで使用した3変数すべてを投入したモデルである（Model 3：モデル間比較）。以上の分析結果を示す（Table 2）。

全体のパターンとしては、価値類似性を説明変数として投入したModel 1および伝統的信頼モデルの要素を投入したModel 2では、いずれのモデルも行政への信頼を有意に説明していた。よって、SVSモデルと伝統的信頼モデルのいずれも行政への信頼を説明するモデルとして有効であるといえる。ただしModel 2では能力への期待は信頼を有意に説明していなかった。Model 1とModel 2の説明率を比較すると、Model 2のほうが高い。これは価値類似性よりも意図への期待が信頼をよく説明するという仮説2を支持する結果である。また、Model 3において価値類似性、意図への期待、能力への期待を直接比較したところ、意図への期待が最も強く信頼を説明しており、まず条件をプールした全体では意図への期待のほうが信頼をよく説明しているといえる。なお、Model 3の重回帰分析に関してはVIF（分散拡大係数）の値は1.09～1.28であったため、この結果は多重共線性の問題によるものではないと考えられる。

さらに、Model 3において価値類似性の説明力が低下したことから価値類似性が意図への期待を媒介している可能性が示唆されたため、媒介分析（Sobelの検定）を行った。その結果、価値類似性は意図を媒介して信頼に影響を与えていた（z=3.05, p<.01）。したがって行政に対する価値類似性と信頼の結びつきの少なくとも一部は意図への期待を媒介したものであることが示された。

条件別に見たところ、行政と利害が対立する上流条件では全体的な傾向と同様にModel 1とModel 2ともに有意に行政への信頼を説明していた。各モデルの説明率は同程度であり、またModel 3においては価値類似性と意図への期待が同程度信頼を説明していた。行政と利害が一致する下流条件では、全体と違い、Model 1で価値類似性が有意に信頼を説明しておらず、Model 2、Model 3では意図への期待のみが有意に信頼を説明していた。第三者条件では、Model 1、Model 2ともに有意に信頼を説明しており、説明率はModel 2のほうが大きく、Model 3でも意図への期待が価値類似性を優越していた。以上より、下流と第三者条件においても仮説2がおおむね支持されたものといえる。

価値類似性と信頼の結びつきを検討するため、各条件において行政への信頼と価値類似性の結びつき（Model 1）を比較したところ、利害の一致する下流条件では有意な相関はなく、結びつきが弱かったが、他の条件については全体と変わらない強さであった。そのため、仮説

Table 2　モデルごとに見た行政への信頼と変数の関係（実験1）

		行政に対する信頼（β）		
	説明変数	Model 1 （SVSモデル）	Model 2 （伝統的モデル）	Model 3 （変数間比較）
全体 （n=73）	価値類似性	.53****		.32***
	意図への期待		.65****	.53****
	能力への期待		.02	.01
	Adj. R^2	.27	.42	.50
上流条件 （n=27）	価値類似性	.61***		.38*
	意図への期待		.59**	.40*
	能力への期待		.11	.08
	Adj. R^2	.35	.35	.44
下流条件 （n=22）	価値類似性	.19		.24
	意図への期待		.52*	.52*
	能力への期待		.03	.07
	Adj. R^2	−.01	.20	.21
第三者条件 （n=24）	価値類似性	.52*		.30*
	意図への期待		.81****	.72****
	能力への期待		−.11	−.18
	Adj. R^2	.24	.56	.63

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001, **** p<.0001

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

Table 3　条件を投入した際の価値類似性が信頼に及ぼす効果（実験1）

	行政に対する信頼（β）		
	Step 1	Step 2	Step 3
価値類似性	.53***	.49***	.51***
上流条件※		.02	−.01
下流条件※		.10	.16
上流条件×価値類似性			−.14
下流条件×価値類似性			−.23
Adj. R^2	.27	.26	.26

*** $p<.001$
※第三者条件を基準カテゴリとしたダミー変数。

1は部分的に支持されたといえる。

当事者性の低い第三者条件と当事者性の高い2つの条件で価値類似性と信頼の規定力の強さに差があるかを検討するため、階層的重回帰分析を用いて条件と価値類似性の交互作用項が有意になるか検討した（Table 3）。Step 1では価値類似性のみ、Step 2では条件のダミー変数、Step 3ではダミー変数と価値類似性の交互作用を投入した。その結果、どちらの条件でも有意な交互作用は見られなかった。したがって、当事者性の低い条件に比べ、当事者性の高い条件において価値類似性の規定力が高いとは必ずしもいえない。

当事者性が高いはずの下流条件で価値類似性が信頼を説明していなかったという結果は、関心が高ければ価値類似性の効果が強くなるという統合モデルからは予測されない。したがって価値類似性と信頼の結びつきの強さは単純に関心の高低のみによって議論できないという見解を支持するものであると考えられる。

考察

条件間の差から、平均値のレベルにおいては価値類似性と信頼は利害関係によって影響されていたといえ、価値類似性と信頼の結びつきについて仮説は部分的に支持された。

しかし、改善すべき点としてそもそも価値類似性が利害の方向という社会的要因の反映であるかを適切に測定されていない可能性が挙げられる。そのため価値類似性が利害共有の側面をとらえているかを確認し、その側面も含めたうえで新たに尺度にして検討する必要があるだろう。

また、利害の一致する下流条件では価値類似性が信頼を説明せず、利害の対立する上流条件で価値類似性が信頼を説明していた。この結果は、シナリオにおける建設反対の論拠が弱く説得的でなかったために上流条件の参加者の間で分散が生まれたという可能性が排除できない。そこで、シナリオがより説得的になるよう改善する必要がある。

モデルの比較では、一貫して意図への期待がもっとも強く信頼を説明していた。しかし、「意図への期待」の下位項目である「この団体の主張は地域全体のためになる」という文言は、主体の持つ特性ではなく、主体のもたらしうる結果に対する言明であり、対象の意図に対する期待が適切に測定されていなかった可能性がある。また、意図への期待の下位項目のいずれが強く信頼を説明しているかについて検討する必要がある。すなわち、公正さと誠実さを分離して検討し、比較したほうがよいだろう（Nakayachi & Cvetkovich, 2010; Renn, Webler, & Kastenholz, 1996）。

そこで上記の問題点を改善し、後続の実験を行った。

実　験　2

方法

実験1の問題点を受け、実験2ではシナリオや質問項目の一部を変更した。具体的には、建設反対側の主張が説得的になるように論拠を追加したり、信頼や誠実さ、公正さを複数項目で新たに尋ねた。その他、価値類似性と利害共有の認知の関係について尋ね、価値類似性との関係を確認した。

本実験

手続きおよび条件操作は実験1と同一であった。ただし、シナリオの変更に伴い、エピソードも改訂版シナリオに応じたものに変更した。

実験参加者　学生92名が参加し、回答に不備のあった者（回答にもれが多い者、割り振られた自分の役割を間違えた者、内容に関する正誤問題で3問中2問以上誤答した者）を除いた82名（M＝54, F＝27, 不明＝1）のデータを分析に用いた。参加者は3つの条件のいずれかにランダムに割り振られた（上流条件：n＝29、下流条件：n＝26、第三者条件：n＝27）。年齢の平均値は18.72、標準偏差は0.82であった。

質問項目　実験参加者は、問題全体の各論点についてどの程度重視するかを回答した後、各主体と実験参加者との価値類似性・各主体との利害共有の程度、主体についての評価（信頼・誠実さ・公正さ・能力への期待など）、ダム建設の賛否などについて回答した。最後に、自分の役割およびシナリオの内容についての操作チェック項目に回答した。

項目はすべて7件法で、内容およびα係数は以下のとおりであった。

信頼：「この団体は信じてよいと思う」「この団体は信頼できる」（行政：α＝.97, 上流団体：α＝.95, 下流団体：α＝.97, 環境団体：α＝.96）

価値類似性：「あなたがこの問題を考えるにあたって重要視することがらと、それぞれの団体が重要視すること

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

がらとは、どれくらい似通っていると思いますか」「あなたは、この問題に関してそれぞれの団体とどの程度利害を共有していると思いますか」（行政：α=.76, 上流団体：α=.76, 下流団体：α=.75, 環境団体：α=.65）、なお行政への価値類似性と利害共有の相関はr=.61（p<.0001）であった。

公正さ：「この団体はこの問題を公正に判断できる」「この団体は公正な手段に基づいて活動するだろう」（行政：α=.77, 上流団体：α=.58, 下流団体：α=.78, 環境団体：α=.80）

誠実さ：「この団体は誠実である」「この団体は自分たちの主張をいつわりなく伝えようとしている」「この団体は自分たちに都合の悪い事実があっても隠したりしないだろう」（行政：α=.78, 上流団体：α=.69, 下流団体：α=.84, 環境団体：α=.83）

能力：「この団体はこの問題に関する専門的知識を持っている」「この団体はこの問題を解決するのに必要な能力をもっている」（行政：α=.72, 上流団体：α=.57, 下流団体：α=.74, 環境団体：α=.67）

結果

基本的に実験1と同様の手続きを用いて分析を行う。なお、性差および年齢については以下の分析では有意な効果が見られなかったため言及しない。

条件ごとの行政主体への評価　条件の操作による違いを確認するため、行政主体への評価の平均値を条件別に示した（Table 4）。各変数に関して、条件を独立変数とする一要因3水準の分散分析を行った結果、行政に対する信頼では条件の主効果が有意であり（F(2, 79)＝3.17, p<.05）、価値類似性でも有意な主効果が見られた（F(2, 79)＝8.46, p<.001）。意図については公正さでは有意な主効果が見られた（F(2, 79)＝4.78, p<.05）が、誠実さでは主効果は見られず（F(2, 79)＝2.12, p=.13）、能力についても主効果は見られなかった（F(2, 79)＝1.11, *n.s.*）。有意な主効果が見られた信頼、価値類似性、公正さについて多重比較（TukeyのHSD法：5%水準）を行ったところ、信頼に関しては有意な差が見られなかったが、価値類似性と公正さにおいて上流条件と他の条件の間で有意な差があった。以上より、実験1と同様の結果が得られ、仮説1はおおむね支持された。

Table 4　行政への評価（実験2）

	上流条件（n=29）	下流条件（n=26）	第三者条件（n=27）
変数名	M（SD）	M（SD）	M（SD）
信頼	3.05（1.64）	3.86（1.26）	3.80（0.86）
価値類似性	3.16（1.53）	4.58（1.13）	4.09（1.21）
公正さ	3.31（1.66）	4.42（1.36）	4.24（1.26）
誠実さ	2.78（1.29）	3.28（1.13）	3.35（0.93）
能力への期待	5.17（1.53）	5.42（0.86）	4.93（1.12）

※数字は7段階尺度の平均値、括弧内は標準偏差。

信頼と各変数の関連　実験1と同様に、行政への信頼を目的変数とする3つのモデルを設定し、それぞれの変数と信頼との結びつきを検討した[2)]。分析の結果をTable 5に示す。

全体としては、Model 1、Model 2の双方が有意に行政への信頼を説明していたが、モデルの説明率はModel 2のほうが大きく、直接説明力の強さを比較したModel 3でも意図への期待の構成要素である誠実さと公正さが信頼を強く説明しており、実験1と一貫して仮説2を支持する結果が得られた。実験1では有意に信頼を説明していなかった能力への期待が有意に信頼を説明していた点が異なっていた。なおModel 3に関してはVIFの値は1.12～2.04であり、多重共線性の問題は生じていないと考えられる。Model 3において価値類似性の説明力が有意でなくなったことから、価値類似性と信頼とのつながりは、他の変数を媒介しているものと推察される。

条件ごとに見た場合も、意図への期待が価値類似性に優越していた。また、Model 3では価値類似性の説明力が極端に低下した。上流条件では誠実さ、公正さ、能力への期待のすべてが、下流条件では公正さが、第三者条件では誠実さと能力が、それぞれ行政への信頼を説明しており、変数の連関のパターンに違いが見られた。なお、Model 3におけるVIFの値は1.20～3.02であり、多重共線性の問題は生じていないと考えられる。

価値類似性と信頼の結びつきは、上流条件では有意、下流条件では有意傾向であり、利害の対立する上流条件では信頼と価値類似性が強く結びつくが、利害の一致する下流条件では弱い結びつきしかないという結果が再現された。第三者条件では有意な結びつきは見られず、実験1と一貫しない結果となった。当事者性の低い第三者条件と当事者性の高い他の条件で価値類似性と信頼の結びつきに違いがあるかを検討するため、階層的重回帰分析を行った（Table 6）。実験1と同様に、Step 1では価値類似性のみ、Step 2では条件のダミー変数、Step 3ではダミー変数と価値類似性の交互作用を投入した。その結果、上流条件と価値類似性の交互作用が有意であった。つまり、上流条件では第三者条件よりも強く価値類似性と信頼が結びついていた。

総合的討論

本研究では、シナリオ実験を行い公共的意思決定場面

2）誠実さと公正さに強い相関があり（r=.67）、多重共線性の問題が生じる可能性を考慮し、Model 2にて有意確率が.10未満のもののみ第三のモデルに投入した分析も行ったが、結果はほとんど変わらなかった。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

Table 5　モデルごとに見た行政への信頼と変数の関係（実験2）

	説明変数	行政に対する信頼（β）		
		Model 1（SVSモデル）	Model 2（伝統的モデル）	Model 3（変数間比較）
全体（n＝82）	価値類似性	.52****		.07
	公正さ		.34***	.32**
	誠実さ		.40****	.38***
	能力への期待		.28***	.27***
	Adj. R^2	.26	.62	.62
上流条件（n＝29）	価値類似性	.61***		.06
	公正さ		.30†	.28†
	誠実さ		.46**	.43*
	能力への期待		.24†	.23†
	Adj. R^2	.35	.65	.64
下流条件（n＝26）	価値類似性	.37†		.15
	公正さ		.58*	.63**
	誠実さ		.30	.21
	能力への期待		−.00	−.07
	Adj. R^2	.10	.61	.61
第三者条件（n＝27）	価値類似性	.26		.07
	公正さ		.19	.16
	誠実さ		.36†	.37†
	能力への期待		.55**	.55**
	Adj. R^2	.03	.39	.36

† p＜.10, * p＜.05, ** p＜.01, *** p＜.001, **** p＜.0001

Table 6　条件を投入した際の価値類似性が信頼に及ぼす効果（実験2）

	行政に対する信頼（β）		
	Step 1	Step 2	Step 3
価値類似性	.52***	.50***	.45***
上流条件※		−.11	.08
下流条件※		−.07	−.07
上流条件×価値類似性			.24*
下流条件×価値類似性			.12
Adj. R^2	.26	.25	.27

* p＜.05, *** p＜.001
※第三者条件を基準カテゴリとしたダミー変数。

において当事者性および利害の方向の違いが行政主体への信頼に与える影響について検討した。その結果、まず、行政主体との利害関係の違いは、行政主体への価値類似性および信頼の高低に影響を与えていた。また、価値類似性は利害共有の認知とも関連していた。したがって、価値類似性の評価が利害関係という社会的な側面によって規定される可能性が示された。また、行政主体への信頼を規定する要因を比較したところ、一貫して意図への期待が信頼を説明していた。

要因間の関連を見ると、価値類似性は意図への期待を介して信頼に影響を与えていた。誠実さや公正さといった意図への期待に影響を与えていることから、価値類似性という概念は利害共有の認知そのものではなく、相手が自分の利害に対して配慮しているかなどといった概念へ拡張できる可能性が示唆される。意図への期待についても、価値類似性という個人の利害にかかわる概念から影響を受けていることから、単にまじめで公正であるといった特性だけでなく、実際に異なる利害の人々に対してどのような立場をとっているかなどの判断を含む概念として拡張可能性があるだろう。

また、本研究では、同じ利害を共有する人々それぞれの間では必ずしも価値類似性と信頼の結びつきは強くならないであろうという仮定のもと、各条件内の信頼と価値類似性の結びつきを検討した。その結果、当事者性が高く行政と利害が対立する上流条件では価値類似性は信頼と結びつき、当事者性が高く行政と利害が一致する下

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

流条件でほとんど結びつかないという結果が2つの実験で一貫して得られた。一方、当事者性の低い第三者条件では価値類似性が実験1で信頼と強く結びつき、実験2で信頼と結びつかないという一貫しない結果となった。

利害の対立する上流条件で価値類似性が信頼と結びついていたのは、先に述べたように価値類似性が利害の配慮として働いていたとも考えられるが、別の可能性もある。たとえば、問題を考えるうえで、全体の利益のような価値を考慮に入れていたという可能性である。特に、実験2において価値類似性の利害共有の側面を強調したにもかかわらず同様の結果が再現され、しかも価値類似性と条件の交互作用を含めた分析で交互作用が有意に説明していた。これは、単なる個人の利害だけでは説明できず、それを超えた公共的な利益などを考慮に入れていたために生じた結果であると考えることができる。そうだとすれば、主要価値の中の個人的利害など私的な側面と、公共的な側面を分けて検討する必要がある。そして、このような作業を通じて、信頼が決定の受容を規定するという研究（Cvetkovich, Siegrist, Murray, & Tragesser, 2002; Slovic, 1993）と、信頼を規定する主要な価値の中に個人の利益に限定されない要素が含まれることを示すことができれば、対立する利害を超えて信頼による合意形成の道筋が見えやすくなるだろう。ただし、実験1では価値類似性と上流条件の交互作用が得られておらず、これは第三者条件における価値類似性と信頼の結びつきが一貫しなかったためであると考えられる。そのため、再現性も含め今後慎重に検討していく必要があるだろう。

なお、利害の一致する下流条件では価値類似性と信頼の結びつきは強くなかった。この結果は、利害が一致する場合には個人の利害が満たされれば公共的価値は関係ないのかという指摘もあるだろう。だが、下流条件でも意図への期待が最も重要であったこと、特に実験2で公正さを重視していたことから、単純に自分の利益を満たせばよいと考えていたとは解釈しにくく、やはり対立を超えた何らかの価値を考慮していたと考えるべきだろう。ただし、公共的価値と、利害が対立する他者への配慮や視点取得については分けて考える必要があり、この点は今後の検討が必要だろう。

第三者条件で価値類似性と信頼の結びつきが2つの実験で結果が一貫しなかったことについては、問題を表層的にしかとらえていなかったために、微小な表現の差異などによって信頼が大きく影響を受けた可能性がある。その傍証として、操作チェック項目の結果がある。操作チェック項目の内容の正誤問題に関して、第三者条件では誤答者が多かった（実験1：上流条件28人中8人、下流条件23人中4人、第三者条件28人中13人、実験2：上流条件30人中1人、下流条件27人中0人、第三者条件28人中8人（1問以上誤答した者、役割を間違えた者を除外））。これは、非当事者である第三者条件の参加者が問題を精緻に情報処理する動機づけをもたないために、問題の細部まで判断材料として用いていなかった可能性を示唆するものである。したがって関心（当事者性）は、各要因（モデル）の影響力に影響するのではなく、各要因をどこまで精査するかに影響するのではないかと推察される。今後、精査の程度と要因の結びつきの関係を検討するような実験を計画し、確認する必要があるだろう。

本研究の限界と展望

本研究の限界のひとつとして、本研究の結果は認知変数間の関連について述べたものに過ぎないということが挙げられる。信頼も自己報告によるものでしかない。今後は従属変数に信頼を示す適切な行動変数を設定する必要がある。価値類似性の項目については先行研究で用いている文言を用いたが、価値の様々な側面を考慮し、たとえば個人的価値と公共的価値の側面に分けて検討していく必要がある。

本研究では社会的要因である当事者性の高低によって関心の操作を行ったが、関心の個人の心理的要因としての側面については操作をしていない。通常は当事者性の高さと関心の高さは一致すると考えられるが、現実場面には、利害関係があるが当該問題に関心がない、逆に利害関係はないが関心があるなど、両要因が必ずしも一致しない場合も考えられる。今後、このような場合も含めて検討していく必要があるだろう。また、本研究は場面想定法を用いたシナリオ実験であった。操作チェック項目における回答や、操作の効果が適切に現れていたことから、参加者にはシナリオが充分リアリティがあるものとしてとらえられていたといえる。ただし、シナリオでは立場や利害関係、論点を明確に単純化しているために操作が有効であったとも考えられる。これに対して現実は複雑に錯綜しており、論点が曖昧なときもある。本研究の知見が現実の公共的意思決定場面にどの程度汎用可能かについては、事例調査などから明らかにする必要がある。

以上のような限界はあるものの、本研究の意義もあるだろう。

まず、価値類似性は利害関係、すなわち、現実の立場という社会的要因が強い影響を持ちうることを示した。価値類似性（主要価値）が利害関係そのものを意味するのであれば、利害対立のトレードオフがある限り、立場を超えた信頼を醸成することはできないが、利害そのものではなく利害への「配慮」を意味するのであれば、それを担保することで信頼を高められる可能性がある。

加えて、価値類似性に個人的な価値の側面と公共的な価値の側面とが混在する可能性が示唆された。本研究で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Social Psychology

は、従来の統合モデルの実験と異なり、実験参加者にシナリオを読ませた後争点について吟味させたうえで、個別の論点、トレードオフになっている価値などを吟味させた後に、価値類似性を表明させるという手続きを取った。この実験手続きが公共的な価値の考慮を促した可能性はある。これは、私的利害を超えた公共的空間における熟議（Habermas, 1990 細谷・山田訳 1994）への道筋を示す潜在的な可能性を秘めている。

従来の研究では、価値類似性が信頼を説明しているという記述的な事実に着目してきたが、人々の相互作用によって主要価値がどのように変容するか、また主要価値が社会的に形成される側面についての検討はなされてこなかった。本研究はその可能性の端緒を示したことに意義があるだろう。

引用文献

Barbar, B.（1983）. *The logic and limit of trust.* New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Cvetkovich, G. & Nakayachi, K.（2007）. Trust in a high-concern risk controversy: A comparison of three concepts. *Jounal of Risk Research*, **10**, 223−237.

Cvetkovich, G., Siegrist, M., Murray, R., & Tragesser, S.（2002）. New information and social trust: Asymmetry and perseverance of attributions about hazard managers. *Risk Analysis*, **22**, 359−367.

Earle, T. C.（2004）. Thinking aloud about trust: A protocol analysis of trust in risk management. *Risk Analysis*, **24**, 169−183.

Earle, T. C. & Cvetkovich, G.（1995）. *Social trust: Toward a cosmopolitan society.* Westport, CT: Praeger Press.

Earle, T. C. & Cvetkovich, G.（1997）. Culture, cosmopolitanism and risk management. *Risk Analysis*, **17**, 55−65.

Habermas, J.（1990）. *Strukturwandel der Öffentlichkeit.* Suhrkamp Verlag Frankfurt.（細谷貞雄・山田正行(訳)（1994）. 公共性の構造転換　未来社）

Hovland, C. I., Janis, I. L., & Kelly, H. H.（1953）. *Communication and persuasion.* New Haven, CT: Yale University Press.

Johnson, B. B.（1999）. Exploring dimensionality in the origins of hazard related trust. *Journal of Risk Research*, **2**, 325−354.

中谷内一也・Cvetkovich, G.（2008）. リスク管理機関への信頼：SVSモデルと伝統的信頼モデルの統合　社会心理学研究，**23**, 259−268.

Nakayachi, K. & Cvetkovich, G.（2010）. Public trust in government concerning tobacco control in Japan. *Risk Analysis*, **30,** 143−152.

Poortinga, W. & Pidgeon, N. F.（2006）. Prior Attitudes, salient value similarity, and dimensionality: Toward an integrative model of trust in risk regulation. *Journal of Applied Social Psychology*, **36**, 1674−1700.

Renn, O., Webler, T., & Kastenholz, H.（1996）. Perception of uncertainty: Lessons for risk management and communication. In V. H. Sublet, V. T. Covello, & T. L. Tinker（Eds.）, *Scientific Uncertainty and its influence on the public communication process.* Boston: Kluwer Academic Publishers. pp. 163−181.

Siegrist, M., Cvetkovich, G. T., & Gutscher, H.（2001）. Shared values, social trust, and the perception of geographic cancer clusters. *Risk Analysis*, **21**, 1047−1053.

Siegrist, M., Earle, T. C., & Gutscher, H.（2003）. Test of a trust and confidence model in the applied context of electromagnetic field（EMF）risks. *Risk Analysis*, **23**, 705−716.

Siegrist, M., Gutscher, H., & Earle, T. C.（2005）. Perception of risk: The influence of general trust, and general confidence. *Journal of Risk Research*, **8**, 145−156.

Slovic, P.（1993）. Perceived risk, trust, and democracy. *Risk Analysis*, **13**, 675−682.

山岸俊男（1998）. 信頼の構造　東京大学出版会

（2012年4月26日受稿，2013年5月31日受理）

NII-Electronic Library Service